

雨降って地固まる

筑波大学人間系 准教授

加藤克紀 (かとう かつのり)

Profile — 加藤克紀

山形県出身。1988年、筑波大学大学院心理学研究科単位取得退学。博士(心理学)。三共(現第一三共)研究員を経て、1994年、筑波大学心理学系講師。2004年より現職。専門は比較心理学。



午後2時半すぎ、動物実験棟の外づけ階段を下りている途中、その揺れは突然襲ってきた。つくば市は地震が少なくない。茨城県南西部には地震の巣があるからだ。しかし、震度はせいぜい3程度だ。ところが、その揺れは違った。次第に大きくなり、歩こうとすると足がもつれた。

関東大震災の再来か。もしそうなら都心はパニックだろうと思った。そして、慌てて、棟内に戻った。これはルール違反である。地震のときには、建物の外に避難することが原則だからだ。しかし、戻らなければならない理由があった。ネズミたちの安否である。

私の専門は比較心理学である。筑波大学には、心理学分野としては日本有数の動物実験施設がある。そのときも、数百匹のマウスがいた。遺伝的に異なる7種のマウスがおり、同じ母親から生まれた子どもを雄と雌に分け、一つのケージで飼育している。もちろん子育て中の母親もいる。もし飼育棚が倒れてケージが落下し、マウスがごちゃまぜになってしまったら、一巻の終わりである。すべてのケージには、系統名や誕生日などが記載されている。出自がわからなくなったら、実験動物としての価値はなくなる。かわいそうだが、すべて安楽死させなければならない。

いつかは来ると心の奥では思っていたが、これまでも震度3や4の地震には耐えてきたので、十分な地震対策をとっていなかった。

私は焦った。

飼育室に飛び込み、早くおさまってくれと祈りながら、手近の飼育棚を両手で支え続けた。必死である。揺れは長かった。数秒後、左手奥の壁際の棚が倒れた。後で調べてみると、キャストの付け根が曲がっていた。その棚には重さ20キログラムの餌袋が八つ乗っていた。地震で揺られ、その重みに耐えられなかったのである。

倒れた棚は中央奥の棚に寄りかかったが、中央の棚は倒れなかった。私は中央手前と右手手前の壁際の棚を懸命に支え続けた。

揺れがおさまった。不幸中の幸いとはこのことだろう。おそらく揺れの方向や建物の構造などが複雑に影響したのだと思うが、ケージは1個も落下しなかった。最悪の事態は避けられた。

筑波大では4階以上で被害が大きかったが、2階も大変だった。飼育室や廊下の床には多くのものが散乱した。整理が悪く、書類や本がうず高く積み上がっていた私の部屋は、床が見えなかった。

揺れが始まってからここまで、ほんの5、6分の出来事である。これからもひどい。直後は停電・断水し、電話もインターネットも使えなくなった。いまだき珍しいのだが、私は携帯もっていない。同僚の女性の携帯で震源が東北沖の太平洋であることを知った。関東大震災の再来ではなかったのだ。つくば市でこんな状態なのだから、東北の太平洋岸は大変だ、津波が来ると思った。その被害の

状況を知ったのは、夕方、停電しなかった自宅に戻ってからである。もちろん原発のメルトダウンなど想像すらできなかった。

動物実験棟では24時間365日空調機が稼働している。実験動物のためである。停電でこれが止まり、換気と室温維持ができなくなった。断水の中でマウスの飲み水をどう確保するか。家族の食料や飲み水も苦労したが、こちらも、今後研究を続けていくためには深刻な問題だった。マイナス80℃の冷凍庫が停止し、同僚の女性は脳の凍結標本をすべて失った。同様の被害にあった生物系の研究者はとても多かったと聞いている。

手元のメモによれば、電気は2日後に、水は6日後に復旧した。漏電やガス漏れ・漏水がないことを確認し、大学の車庫に設置された震災対策本部に報告し、許可が得られた後、施設部の職員が順次建物の主電源を入れたり、元栓を開けたりしてくれるのである。そして3月18日に、余震が続く中、10日ぶりにマウスのケージを交換できた。メモはそこで終わっている。

東北の方々に比べれば、被害はもちろん小さい。地震発生が3月中旬だったため、空調停止による室温低下も比較的小さくて済んだ。またマウスの水は、隣接地区の復旧が早かったおかげで、同僚の女性がポリタンで自宅から運んでくれた。

11月上旬、遅ればせながら、動物実験棟にある棚などの転倒防止工事を終えた。おそらく、これで、震度6の地震が再び来ても、飼育棚を必死に支える必要はなくなったように思う。雨降って地固まるとはこういうことかもしれない。そうなることを切に願っている。